

サンパイ・ベルジュンパ・ラギ

かつおきんや・作／永井吐無・絵



■かつおきんや（勝尾金弥）

1927年金沢市に生まれる。金沢大学卒業後、中学校教師を経て現在は愛知県立大学助教授。日本児童文学者協会及び日本児童文学学会会員。北陸児童文学会及び金沢子どもの本研究会の中心メンバーとしても活躍中。歴史調査のねばり強さと、推理して事実への糸口をつかむひらめきには独特のものがある。主な著書に「天保の人びと」(サンケイ児童出版文化賞)「七つばなし百万石」(日本児童文学者協会賞)が収録された『かつおきんや作品集』(全18巻・偕成社)などがある。本シリーズの第3巻はインドネシア編の予定。

現住所／石川県金沢市笠舞1-19-22

■永井吐無（ながいとむ）

1944年愛媛県に生まれる。日本橋三越をはじめ個展10数回。スペイン滞在時の経験を題材にした絵本『ばくがかいた家』（リブリオ出版）などがある。

現住所／東京都国分寺市光町2-3-8

○資料等でマレーシア観光開発公社東京事務所にお世話になりました。お礼申し上げます。

はじめての海外旅行 第2巻（マレーシア編）

サンパイ・ベルジュンパ・ラギ NDC 915/226 P/22 cm/A 5

1984年11月20日 第1刷印刷

1984年11月30日 第1刷発行

著 者 かつお きんや

発行者 石井 昭

発行所 株式会社 リブリオ出版

〒112 東京都文京区関口1-21-19

電話 03-267-7155

印 刷 新興印刷製本㈱

製 本 小高製本工業㈱

© Kinya Katuo 1984 Printed in Japan 乱丁・落丁本はおとりかえします
ISBN4-89784-056-2

はじめての海外旅行② マレーシア編

サンパイベルジュンパ・ラギ

かつおきんや・作

永井 吐無・絵



日本財団支援

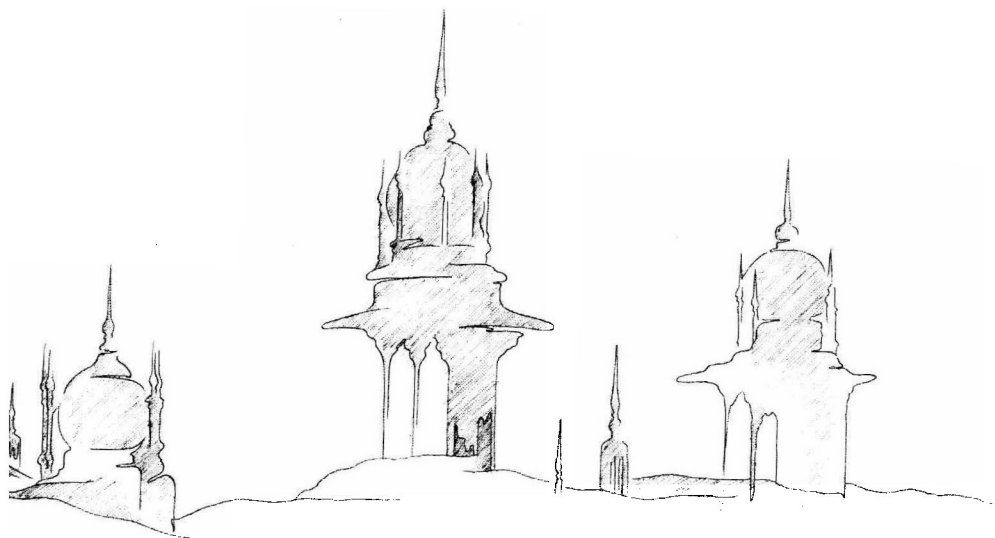
笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

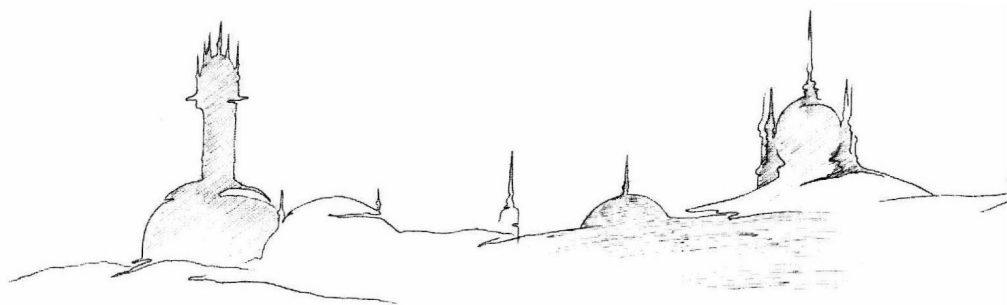
サンパイ・ベルジュンパ・ラギ／もくじ

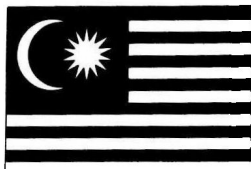
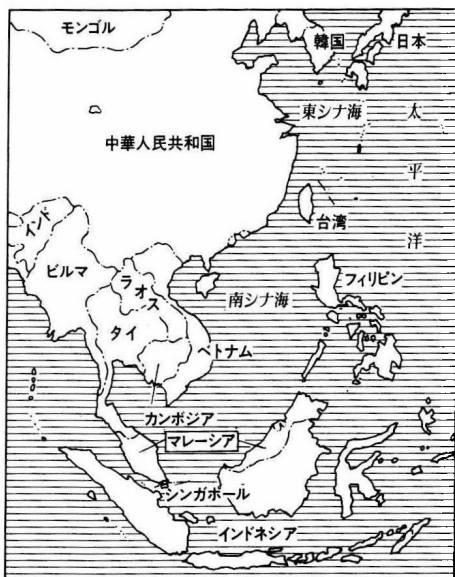


6	6	3	2	1
グリル・マラッカ	となりの家族	テリマカシ	花もようのハンカチ	え? マレーシア?
.....				
93	73	57	24	8



7	ムルデカ・スタジアム……………	108
8	マラツカは歴史の町……………	123
9	興亜訓練所……………	145
10	カマリアさん……………	163
11	サンパイ・ベルジュンパ・ラギ……………	180
*	取材ノート……………	201





マレーシア
Malaysia

面積 約33万3千km²

人口 約1,414万人

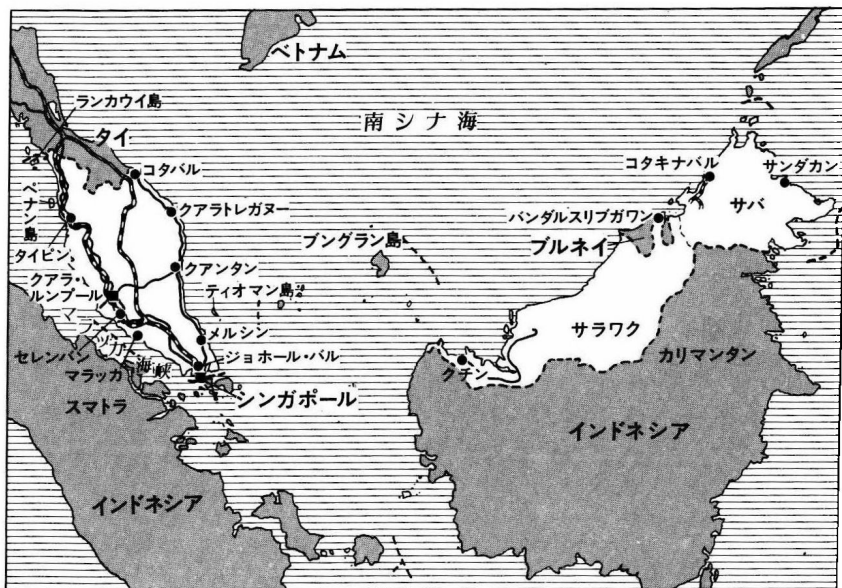
マレー系 40.3%

中国系 29.6%

インド系 8.1%

首都 クアラ・ Lumpur

公用語 マレー語



サンパイ・ベルジュンパ・ラギ

Ⅰ え？ マレーシア？

話のはじまりは去年きょねんの秋、九月はじめのある日の夕方だった。玄関げんかんのチャイムがなったので、「どなたですか。」

といいながら、ドアをあけたミカは、思わず、

「うそー。」

といってしまった。こんな早い時間にパパがかえってくるなんて、とても信じしんられない。顔だけ出したママも、ポカンとして、

「熱ねつでもあるんですか？」

ときく。だけど、パパはケロッとして、

「やれやれ、ふたりともとんだごあいさつだねえ。」

と、きつさとかつをぬいで中にはいり、



「ちよつと君たちをびつくりさせようと思つてね、あすは雨かもしれないけど。」
とニヤニヤしている。

ママは大いそぎでふろの用意をし、

「どうぞ、ゆつくりはいつてきてくださいね。」

といつてパパを送りこむと、夕食のしたくに大あわて。

「ミカ。コロツケと、エビフライと買つてきてちょうだい。道草をせずにね。」

ちよつとひとこと多いと思つたが、ぐつとこらえてスーパ―までいって、かえつてきてみて、二度びつくり。浴室から歌声がきこえている。

「パパ、なにかいいことあつたのかしら。」

といいかけて、ふと気がつくと、台所にいるママまではな歌をうたっている。ただし、パパは演歌「矢切の渡し」で、ママは「四季の歌」だ。

「結婚記念日は一月のはずだし、パパの誕生日までは、まだ十日あるし……。」

とミカが首をかしげていると、きざみキャベツをもったおさらを指さして、

「それに今買つてきたのをもりつけして、テーブルにならべてちょうだい。六年生だからできるでしょ。」

これもチクツとくる。これさえいわなきや、けつこう話のわかるママなのに、と思つたが、

きようはまたもやき流すことにした。

パパが早くかえったわけは、まもなくわかった。

夕食のテーブルについて、つめたいビールをグーツとのんだパパは、ふたりの顔を見ながら、いきなりたずねた。

「パパが外国へいくとなったら、君たち、どうする？」

パパにすすめられて、やはりビールをつきあっていたママは、あわててコップをテーブルにおいてききかえす。

「あら、もう正月休みの計画？ 安いツアー見つかったんですか。」

パパはそれには答えず、笑ってビールをのんでいる。ミカはピンときた。

「わかった、パパ、海外勤務のことでしょ。」

「ほう。ピタシカンカンだよ、ミカ。」

だから、こんなに早くかえってきたし、おふろで歌も出たわけだ。ママがビールをトクトクとつぎながらきく。

「どこへいくんです？ いつからですか？」

「いやあ、あいかわらずせっかちななあ、君は。きようは、部長によばれて、ともかくいく気があるか、いくことになってもよいか、二、三日中に返事をしろっていわれただけなんだ。」

「でも、いつごろからということはいってみえたんでしょ？」

「来年^{らいねん}二月から、三年間だ。だから、やはり君^{きみ}たちの考えをきいてからじゃないとね。」

「あなたご自身^{じしん}はどうなんです？」

「うん、今の気持ちからいえば、六分四分^{ぶくぶん}、いや、七分三分^{ぶくぶん}かな。」

「七分^ぶの方がいききたい気持ちね？」とミカ。

「そう。ちょうど自分をリフレッシュするチャンスじゃないかと思うんだ。」

「リフなんとかって、なに？」

「きぶんをかえて新しくするんさ。だいぶき使われて、ガタがきはじめとるからね。」

それからパパは、なぜきぶんを新しくする必要があるのか、説明^{せつめい}をしだした。

パパの生まれは一九四六年九月、ベビー・ブームとよばれて、小学校の時から同期生^{どうきせい}が多く、同じ時期^{じき}に入社^{にゅうしゃ}した者がたくさんいる。これから、その中でふるいわけがおこなわれるので、そのためにも、ぜんぜんちがう土地へいって、自分についても、仕事^{しごと}についても見なおしたいというのがパパの理由^{りゆう}だ。

だまってきいていたママがたずねる。

「でも、海外勤務^{かいがいきんむ}というと、若い方^{わか}が多いんじゃないやありません？」

「ここ十四、五年、ずっとそうだった。だからわれわれ世代^{せだい}はとりのこされた感じだったんだ

が、最近さいきんはいった若わかい連中れんちゆう、さっぱりいきたがらないらしいんだ。」

「へえ。どうして？」

「理由りゆうはそれぞれにあるようだが、つまるところ、知らないところへいくのが不安ふあんで、少しでもかわつたところへいくのが、こわいらしいんだ。こっちは、そんな話をきいたら、よけいいきたくなってきたんだ。まだ四十前だしな。」

ママがパパの顔をまつすぐ見つめて、おちついた声でいった。

「パパがいこうって思われるんなら、あたしはよろこんでさんせいしますわ。」

「一緒いっしょにいつてくれるかい？」

「それがおのぞみなら。」

まるでメロドラマでも見ているみたいなので、ミカは大きくせきばらいしていった。

「あのう、あたしという者もいるんですが。」

ちらつとふりむいたママが、そつけなく答こたえる。

「パパとママが外国がいこくへいくんだもの、あんたがついてくのはあたりまえでしょ。」

このいい方に、こんどはがまんできないと、ミカが文句もんくをいおうとしたところで、すかさずパパがいう。

「ごめん、ごめん、ミカの考えも、ぜひきかせてほしいな。ミカは、パパの海外勤務かいがいきんむ、さんせ

いしてくれるかい？」

しかたなくだまつたままうなずくと、つづけてパパはきく。

「ママも一緒にいくといったら、君もそうしてくれる？」

こんなパパにミカは弱い。まだだまつてうなずいて、ママの方を見ると、もうれつないきおいでコロッケを食べている。ミカもまけるものと、エビフライにかぶりついた。

パパはおいしそうにビールをのみ、枝豆をつまみながら、ひとりごとのようにいった。

「アメリカ、カナダ、ひよつとしたらオーストラリアかもしれないな。とにかくいく意志ありと、あした部長にもうし出よう。すっかりあきらめていたゆめが、今ごろになってころがりこんできたわけだ。」

そのあくる日からパパは英会話のテープを車に持ちこみ、ママはNHKのテキストを買ってきてテレビで勉強しはじめた。

結婚する前、ふたりは英会話スクールへかよっていて、そこで知りあったのだそうだ。

ミカがまつさきに話したのは、親友のマリだった。

あくる朝、学校へいくとちゅう、きのうの話をすると、マリはあつさりいった。

「あら、そう。それでどこへいくの？」

「一月ぐらいにならないと、はつきりしないんだって。」

「それなら、ミカは、四月にそちの日本人学校にはいるのね。」

これはミカが少しも考えていないことだった。

「あ、そうか。そうなるのよね、きつと。」

「三年間だったら、中学生のあいだじゅうか。かえってからがたいへんよ。」

と、マリは考え深い。だが、これまたミカにはわからないことだ。

「どうして？ なにがたいへんなの？」

「だって、かえったらすぐ高校受験^{じゅけん}でしょ。むこうには塾^{じゅく}もないし、どうしてもものんびりしちゃうから、日本での受験競争^{じゅけんきょうそう}には、てんで追いつけないんだって。あたしの友だちのおにいさん、一年間だけシンガポールにいて、中学二年になる時、ひとりだけさきに日本にもどっていったわ。」

マリはこの四月にシンガポールからかわってきた。はじめのころは、ふだん話をしていても、ときどき英語^{えいご}が出た。それを、クラスの女の子の中には、「きざねえ」といって、いやがらせをする子もいた。男の子たちは、マリが日焼^やけているのに目をつけて、「土人^{どじん}」というあだ名をつけて、よくからかった。ミカは家がわりあい近かったし、学校のいきかえりも一緒^{いっしょ}だったから、

「気にしない、気にしない。」

と、いつもなかよくしていた。のんびりやで体も大がらなミカと、しっかり者で小がらなマリと、正反對だからかえてよかったのかもしれない。

五月ごろ、みなのにじめぶりがひどかったある日、ミカがなぐさめると、マリはいった。

「四年生にもつとかわいそうな子がいるの。その子、アメリカに三歳の時からずっといていて、この四月、帰国したの。それで、日本語にくせがあるんで、クラスのみんなから笑われるし、授業中に先生にまでばかにされ、ランチ・タイムにわざとその子だけ、おかずが少なかつたりするの。そして、少ないっていうと、そのいい方がおかしいって、また笑うんだって。」

「ひどいわ。最低の先生ね。マリのいもうとさんはどうなの？」

同じ学校の三年にいもうとがいる。

「あの子は、シンガポールにいた時も、うちでも日本語をちゃんと話していたし、近所に日本人の友だちがなん人もいたから、英語なんかほとんど知らないくらい。」

「シンガポールって、日本人が多かったのね。」

「そう。それにいもうとの今のうけ持ちの先生がとてもいい先生で、いもうとのクラス、ほんとにみんなながいいの。うちへもよくあそびにくるわ。」

そのかわりにマリは四年生のその子の家へ行って、あそんでやつたりしているのだという。